様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１７３０６２１

研究課題名（和文）小学校英語における文字指導に関するカリキュラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and Evaluation of the Curriculum of Teaching Phonics in English Education to Elementary School Students

研究代表者
赤沢　真世（AKAZAWA, Masayo）

立命館大学・スポーツ健康科学部・准教授

研究者番号：６０５０８４３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,200,000円、（間接経費）　960,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，小学校英語教育における文字指導のカリキュラムの開発評価を目的とした。とりわけ、アメリカにおける「ホール・ランゲージ（Whole Language）」に理論的枠組みを求め、個々の子どもの生活経験や母語における知識・経験をも重視した文字指導のあり方を探究した。特に，音声による言語活動から文字による言語活動の移行・接続で重要となる「フォニックス（phonics:音声と文字をつなぐルール）」の指導，とりわけその前提となる学習をメインとした学習用小冊子を開発した。さらに、研究主任等の教員、指導主事に小冊子の活用についてフィードバックを得ており、今後の改善に繋げたい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project was to develop the curriculum of teaching phonics of English to elementary school students and evaluate it. The curriculum was based on the theory of Whole Language approach, which sets a high value on children's experiences(needs) including their mother tongues and cultures in learning a language. As a product of this project, a booklet (teaching material) was developed for learning phonics and phonemic awareness. In addition, feedback about the booklet from teachers would be used to evaluate and revise the curriculum and the booklet.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：小学校英語　カリキュラム　文字指導　フォニックス　評価　ホール・ランゲージ

１．研究開始当初の背景

(1) 学術的背景

2002（平成 14）年度より「総合的な学習の時間」における国際理解教育の一環として導入された小学校英語活動は，『小学校英語活動実践の手引』（2001）によって具体的に示された方針によって，英語によるコミュニケーションの関心・意欲・態度の育成という面を重視するものとなっている。多くの場合，子どもの生活経験を重視し，身近な生活にもとづいたテーマによって単元・教材が展開され，目標や方法論については一定の定着をみていた。

しかしながら，一方で，2011（平成 23）年度より全面実施される小学校学習指導要領によって，「外国語活動」として高学年に英語が必修化されることを受け，小中連携をいかに図るかという点が極めて重要な課題となっていた。とりわけ，音声中心・情意面の育成中心に展開される小学校英語活動と，中学校で本格的に開始される文字によるコミュニケーション能力の育成をめざした英語教育を〈いかに接続するか〉という問題は，解決が急がれる課題である。この点について，これまで文字指導を「行わない」としていた方針から，新学習指導要領においては補助的な文字の取り扱いを許容する記述へと転換したことは留意すべきことであり，文字指導の具体的な導入・展開について，具体的なカリキュラム構築が目指されている。

(2) 先行研究

ところで，小学校英語活動における文字指導をめぐっては、すでにその必要性や指導の実態が論じられている（例えば野呂忠司「小学校の『英語活動』における文字指導の意義と必要性―小学校と中学校における文字指導の連携をめざして―」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第 7 号，2004 年）。また，文字指導の前段階として，フォニックス指導を小学校英語活動において扱った先進的な事例研究もある（例えば東仁美「音声中心のフォニックス指導―公立小学校高学年での文字導入の試み―」『聖学院大学論叢』第 18 巻，第 3 号，2005 年）。

しかし，これらの研究の多くは文字指導を単発的な指導としてとらえており，小中連携という長期的な視野からカリキュラム開発を考慮したものではない。その中で、村端五郎・高知県田野町幼小中連携英語教育研究会編『幼小中の連携で楽しい英語の文字学習』―10 年間の指導計画と 40 の活動事例―』(明治図書、2005 年）は、文字指導の小中連携に着目し、ローマ字と英語の文字学習の関連付けや一度に大量の文字を学習させないという文字学習で考慮すべき点を論じているほか、文字学習を楽しくするための実践的なゲームを紹介したものであり、小学校での英語の文字学習をめぐる先行研究としてもっともまとまったものだといえる。しかしながら、こうした長期的なカリキュラム開発の際には，これまで子どもが蓄積してきた母語に関する知識・経験，音声中心の活動で得た英語に関する知識や経験，さらに生活経験をも含んだ総体としての「言語経験」を出発点とし、それらの関連を考慮しなくてはならない。（ローマ字学習も含む。）そしてまたそのためには、彼らの言語経験を把握する機会の設定やツールの開発が必要である。けれども現状では，そのような意識にもとづいた小学校英語における文字指導の研究はまだ進められていない。

(3) 自身のこれまでの研究

こうした背景を踏まえ，本研究代表者はこれまで，1980 年代ごろよりアメリカで展開された，子どもの言語経験を尊重し，現実の言語活動における言語発達を重視した「ホール・ランゲージ（Whole Language，以下 WL とする)」というアプローチに着目し研究を進めてきた。

このWLは日本の小学校英語教育において注目されているものの，「子どもの生活に根ざした言語活動そのものを尊重した言語活動を行う」という理念が紹介されるのみで，実践現場に即した具体的な検討はほとんど行われていなかった。そこで，自然な言語発達を重視するWLと系統的な基礎スキルの指導を主張するフォニックス派との論争に注目し，子どもの言語経験を尊重した WL が基礎的なスキル指導（フォニックス指導：「文字と音声のルール・結びつき」を指導すること）をどのように位置づけ展開しているかを検討し、日本の小学校英語教育への示唆を明らかにした（赤沢真世「ホール・ランゲージにおけるフォニックス指導の位置づけとその実践―Ｃ．Ｓ．ウィーバーの所論を中心に―」『日本児童英語教育学会紀要』第 23 号，2004 年)。

また 90 年代より両者の統合をめざす「バランス論」を主張する論者が複数登場し，子どもの言語経験を踏まえながら，基礎・基本とされるフォニックス指導を位置づけようとする方向性が示されたことについて，一つの理論・実践を対象に，教師が子どもの言語経験をいかにしてとらえ，フォニックス指導の系統性を確保しているかについて検討した（赤沢真世「現代アメリカにおける 4 ブロックス・アプローチの理論と実践―ホール・ランゲージとフォニックスの統合をめざして―」『日本児童英語教育学会紀要』第 26 号，2007 年など)。

こうした成果は、日本での実践現場における具体的な指針としてすでに活用されている（東，前掲論文，2005)。また本研究代表者は，日本の小学校英語について，文字指導を軸として先進的な取り組みを分析し，そこでの到達目標・指導内容についての方向性を明らかにした（赤沢真世「小学校英語活動に

おける文字指導の現状と課題」『教育方法の探究』京都大学大学院教育方法学研究室，2007 年など)。

２．研究の目的

こうした研究的背景を踏まえ、本研究は，小学校英語における文字指導のカリキュラムの開発と、その試行、評価を目的とした。とりわけ、これまで個々の子どもが蓄積してきた生活経験や母語における知識・経験をも重視し、子どもの言語経験全体を踏まえた文字指導のあり方を探究することを掲げた。

特に，小学校英語教育（活動）において重視されている音声による言語活動から，中学校以降の英語教育でより重視される文字による言語活動の移行・接続に注目し，文字指導やその前提となる「フォニックス（phonics: 音声と文字をつなぐルール）」の指導に焦点化し，そうした軸によってカリキュラムを開発することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は以下の二点を研究の柱として以下のような研究方法をとった。

(1)アメリカの入門期英語教育における文字指導のあり方についての研究

入門期（小学校入学前から小学校低学年）の指導内容として最も重要な英語の文字と音声の関係についての指導（フォニックス指導）を対象に，子どもの言語経験を重視するアプローチ（WL に代表される立場）では，指導内容や系統性をどのように設定・構築しているか，そして指導の出発点となる子どもの言語経験の蓄積をどのような機会・ツールを用いて見とっているのかについて，理論的・具体的に明らかにする。その際にはこれまでの研究で残された課題である，移民の割合が多い地域（アリゾナ州，イリノイ州，カリフォルニア州など）での取り組みに焦点化する。というのも，英語についての言語経験が乏しい移民の子どもを対象とし，母語や彼らの生活経験をも言語経験の総体として尊重した英語教育のあり方を探ることは，英語での言語経験が多くはない日本の子どもを対象とした指導について示唆に富むと考えられるからである。

(2)小学校におけるアクション・リサーチによる文字指導を軸としたカリキュラム試案の開発

小学校英語の取り組みをすでに進めている先進校が独自に開発したカリキュラムを収集・検討し，とりわけ文字指導に関して，指導内容・指導の系統性を分析する。その上で，研究協力校において，具体的な単元づくり・授業づくりを通して，子どもの言語経験にもとづいた文字指導のあり方を検討し，文字指導を軸としたカリキュラム試案（カリキュラムの大枠だけではなく、文字指導でのワークシートやそのワークシートを用いた評価方法の提案も含む小冊子）を開発する。また、その試案を研究協力校で試行し、その評価、改善を行う一連の取り組みを目標とする。

４．研究成果

３で示した二つの柱にしたがって、以下のような成果があげられた。さらに(3) は(1) と(2) を踏まえた最終的な成果として位置づいている。

(1) アメリカの入門期英語教育における文字指導のあり方についての研究

①WLとフォニックス指導の融合を目指す「４ブロックス・アプローチ」の理論・実践について、とりわけ評価（内容、方法）を再検討した。そこから、日本の小学校英語での文字指導における小中連携を視野に入れた指導の系統性、子どもの言語経験の蓄積を重要視した評価方法として、教師用および児童用チェックリストの可能性や、言語発達記録の方法を検討・提案した（日本児童英語教育学会で発表）。
②フォニックス指導をめぐるあらゆる立場の教材・教科書の収集を行った。言語教育の立場によって異なる実態があり、フォニックス指導の前提として音韻認識を重視するか否か、フォニックス・ルールとして扱う学習内容の相違、指導の系統性の相違について明らかになった。
③フォニックス指導の前提として位置づけられる「音韻認識能力」の指導をめぐるアメリカでの議論について、研究図書および指導資料を収集し、検討を進めた。2013年7月にはアメリカ・ニューヨークで行われたWhole Language Umbrella（子どもの言語経験を重視するアプローチをすすめる現場教師・大学教員を中心とした研究団体）の年次大会に参加し、こうした能力の指導の必要性、具体的指導方法について研究的な手法を学んだ。
④WLの発祥の地であるアメリカ・アリゾナ州で訪問・調査を行った。理論的第一人者であるK.Goodman、Y.Goodmanへのインタビュー、現地小学校での授業観察、教員へのインタビューを行った。現在も移民の多い地域であり、WLの理論が依拠する子どもたちの生活実態を知るとともに、英語学習と母語の経験・知識を橋渡しすることの重要性、具体的な指導方法について知見を得た（2013年2月26日～3月4日）。
⑤④のアメリカ訪問において、1990年代を中心としてWhole Language の研究が進展していた時期の理論的・実践的牽引者による講演記録のデータおよび文献を入手した。

(2) 小学校におけるアクション・リサーチによる文字指導を軸としたカリキュラムの開発と評価

①文字指導に関する先行研究の収集、また先進的な取組をすすめる自治体（京都市や寝屋川市、千葉県いすみ市、新潟県長岡市）や私立小学校等のカリキュラムを収集、訪問調査し、文字指導に焦点化してカリキュラム・教材・評価方法についての分析を進めた。
②『英語ノート』、『Hi, friends!』を用いた文字指導について、京都市立小学校、彦根市立小学校において授業観察や子どものワークシート、ふりかえりシートなどの資料収集を行い、子どもの文字指導にかかわる言語発達の状況を観察した。
③H21 年度に作成した文字指導の指導モデルを元に、子どもの言語経験を尊重する文字指導のあり方について、フォニックス指導の可能性や具体的な教材、評価の内容・方法について現場教員との意見交流を行った。
④文字指導カリキュラムの骨子（学年に応じた文字指導の長期的ルーブリック試案）を作成し、教育目標評価学会にて発表を行った（2011年）。
⑤日本の児童向けにすでに開発されている文字指導のワークブックや「音韻認識能力」を育成する教材について、分析を行い、日本の児童英語教育の教材においても、音韻認識能力を意識した教材がいくつか存在するものの、指導の系統性、内容の吟味については相違があることを明らかにした。この成果は、日本教育方法学会にて学会発表を行い、発信した（2013年）。

(3) 小学校外国語活動における文字指導パンフレットの作成、評価と、本研究の意義、期待される効果

最終的に、（１）の理論的基盤、実践研究をもとに、（２）の日本の小学校外国語活動における文字指導の方向性、実施可能性を鑑みて、文字指導用のパンフレット（児童用）『英語の文字　発見！ノート』を作成した。
こうした成果は、小学校外国語活動の教科化の動き、および中学校英語教育との接続の在り方をめぐる議論のなかで、学校現場で求められる具体的な文字指導の方法について一つの方向性、案を提示するものとなる。

完成後、授業研究で関わる小学校の研究主任、指導主事、教員に順次配布している。合わせて、内容や指導の系統性、学校現場での利活用の可能性についてフィードバックを得ている。今後は、小冊子の配布と合わせてフィードバックを得ることによって、さらにカリキュラムの評価を進めていくとともに、パンフレットの改訂を行い、音韻認識能力を意識した文字学習の実施を展開していきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）
①著者名：赤沢　真世
論文標題：小学校英語教科化の課題
雑誌名：『子どもを「育てる」　教師のチカラ』日本標準
査読：無し
巻：18
発行年：2014
ページ：34-35

②著者名：赤沢　真世
論文標題：英語科におけるパフォーマンス評価の意義と課題 ――E.FORUM スタンダード第一次案作成を通して――
雑誌名：京都大学大学院教育学研究科スクール・リーダー育成研修 E.FORUM 成果報告書『E.FORUM 共同研究プロジェクト【プロジェクト S】「スタンダード作り」成果報告書
査読：無し
巻：１
発行年：2014
ページ：155-166

③著者名：赤沢　真世
論文標題：英語科における「本質的な問い」とパフォーマンス課題
雑誌名：指導と評価
査読：無し
巻：57（12 月号）
発行年：2011
ページ：50-53

④著者名：赤沢　真世
論文標題：英語教育のカリキュラム編成と評価－天野小学校の実践研究から見えてきたこと－
雑誌名：東京学芸大学教員養成カリキュラム開発センター『「小学校英語」教育の可能性と課題を探る－本格実施前の「小学校英語」教育で見えてきたこと』
査読：無し
巻：１
発行年：2011
ページ：39-45

〔学会発表〕（計　４　件）
①発表名：西岡加名恵・石井英真・赤沢　真世
発表論題：E.FORUM スタンダード開発の試み－算数・数学科と英語科を中心に－
学会名：教育目標・評価学会
発表年月日：2013 年 12 月 1 日
発表場所：滋賀大学（滋賀）

②発表名：赤沢　真世
発表論題：小学校外国語活動における文字指導―子どもの言語経験からフォニックスへのつながりを意識して―
学会名:日本教育方法学会第 53 回全国大会
発表年月日：2013 年 10 月 6 日
発表場所：埼玉大学（埼玉）

③発表名：赤沢　真世
発表論題：ホール・ランゲージにおける「音韻認識能力」を高める指導―小学校外国語活動における文字指導への示唆―
学会名： 教育目標評価学会第 23 回年次大会
発表年月日：2012 年 11 月 11 日
発表場所：東洋大学（東京）

④発表名：赤沢　真世
発表論題： 外国語活動における一人ひとりの実態を捉える評価の工夫－ホール・ランゲージにおける評価方法を手がかりに－
学会名：日本児童英語教育学会（JASTEC）全国秋季研究大会
発表年月日：2010 年 11 月 07 日
発表場所：大阪成蹊大学（大阪）

〔図書〕（計　4　件）
①著者名：袁 振国（監修）、 南部 広孝（編集），高 峡（編集），辻本 雅史
出版社名：京都大学学術出版会
書名：『東アジア新時代の日本の教育ー中国との対話』
発行年：2012
ページ数：101-118（赤沢真世・西岡加名恵・田中耕治「第 2 章 日本における教育課程をめぐる課題と展望」）

②著者名：田中耕治　編著
出版社名：日本標準
書名：『小学校 新指導要録改訂のポイント』
発行年：2010
ページ数：86-91（「第 2 章 10 外国語活動―子どもの実態をふまえ，伝え合うコミュニケーション場面を設定する」）

③著者名：田中耕治　編著
出版社名：日本標準
書名：『時代を拓いた教師たちⅡ』
発行年：2009
ページ数：113-124（「第 2 章 阿原成光と英語教育―人間らしさを尊重した英語教育―」）

④著者名：田中耕治　編著
出版社名：ミネルヴァ書房
書名：『やわらかアカデミズム・＜わかる＞シリーズ よくわかるカリキュラム』
発行年：2009
ページ数：100-101，150-151　（「総合的な学習の時間のカリキュラム」「授業の評価」）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
ホームページ等
http://research-db.ritsumei.ac.jp/Profiles/80/0007961/profile.html

http://www.ritsumei.ac.jp/sahs/html/virtual/akazawa.html

６．研究組織
(1)研究代表者
赤沢　真世（AKAZAWA　Masayo）
立命館大学・スポーツ健康科学部・准教授
研究者番号：60508430

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし